

---

## ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 93

April 2014

---

### 2014年度大会—日本大学文理学部で

ロシア史研究会2014年度の大会準備が始まっています。今年は、10月18日（土）、19日（日）に日本大学文理学部キャンパス（東京都世田谷区）にて開催されることになりました。ぜひ、奮ってご参加ください。

大会共通論題について、委員会よりお知らせいたします。本年度大会の共通論題は「第一次世界大戦とロシア（仮）」と「スターリン後のソ連外交・国際関係（仮）」となりました。後者については外部からも報告者をお招きする予定です。報告者、コメンテーター等、詳細は次号でお知らせいたします。

2014年4月20日  
ロシア史研究会委員会



（写真は2014年3月22日の例会/ 土屋好古撮影）

## 〈ロシア史研例会報告〉

【3月例会報告】 徳重豊「19世紀中葉ロシア論壇におけるブルガリア民族再生運動への関心—スラヴ学者ヴェネーリンの業績を巡って—」

吉村貴之（早稲田大学）

去る3月22日（土）の午後3時より青山学院大学にて例会が開催された。明治大学大学院文学研究科の徳重豊氏が『19世紀中葉ロシア論壇におけるブルガリア民族再生運動への関心—スラヴ学者ヴェネーリンの業績を巡って—』と題して研究発表を行った。ユーリー・イヴァーノヴィチ・ヴェネーリン（本名ゲオルギー・フツァ、1802～1839）というウクライナ西部辺境の出身で、民族的出自も諸説あり、なおかつ神学や医学を修めた後に、バルカンで学術調査を行ったという特異な経歴の持ち主が、ロシアにおいてブルガリア研究の基礎を築き、なおかつブルガリア人の民族再生運動にも寄与したとの評価が1840年代以降のロシアで高まったことの社会的背景についての分析が発表の主眼であった。

19世紀初頭のロシアにおいて、ギリシア独立戦争は強い共感を呼んだが、それに比べると同じバルカンのブルガリア人に関する関心は低調だった。一方、黒海貿易や18世紀の露土戦争の影響でベッサラビアや黒海北岸に移住するブルガリア人が増加し、特にオデッサのブルガリア人のアプリーロフは1835年に世俗学校を設立した。ヴェネーリンは、こうしたブルガリア人と接触し、ファナリオット（オスマン帝国下のギリシア人支配層）の影響力拡大によるバルカンのブルガリア語衰退を防止しようとしたブルガリア民族再生運動をロシア論壇に啓蒙するため論考を1830年代に発表した。しかしながら、当時の論壇の反応は冷淡であったものの、ヴェネーリンの死後の1842年末に、オデッサのブルガリア人達がヴェネーリンの貢献を顕彰する記念碑を設置する運動を始めたことを『サンクト・ペテルブルク報知』が好意的に報じるなど、徐々に故人への注目が集まった。これは1840年代に入り、ロシア政府がブルガリア人の留学を支援するようになっただけでなく、パン・スラヴ主義が論壇で興隆し、バルカンのスラヴ系であるブルガリア人の役割が重視されるようになったことも背景となっている。

もっとも、ロシアのブルガリア人はこれを足掛かりに、ロシア政府からバルカンでの民族運動に対するさらなる支援を取り付けようとしたものの、オスマン帝国との外交関係が複雑になること憂慮して、政府の態度は抑制的であった。そのため、1850年代もオデッサ・ブルガリア人委員会を中心としてヴェネーリンを啓蒙する活動が行われ、その一環としてパラウゾフによるヴェネーリンの伝記が出版された。これに対し、ロシア人のスラヴ学者は、相変わらずその学術的な水準に対する欠陥は問題視するものの、ブルガリア人自身が忘れていたスラヴ系としての過去を再生し、民族意識を覚醒させた政治的貢献については否定しようがないといった折衷的な評価を下すようになり、これが1892年の『ブロックハウス・エフロン百科事典』におけるヴェネーリンの記述に受け継がれることになった。

以上が、当日の発表の趣旨であった。ヴェネーリンといういささか好事家的なスラヴ学者がスラヴ系としてのブルガリアの過去を「再生」し、それが在露ブルガリア人によってブルガリア民族運動の興隆時に大いに喧伝されたという点が興味深い。民族運動史とロシア思想史との境界領域を切り開く意欲的な内容で熱のこもった発表だったが、残念だったのは、本例会が春休み中に行われたせいで、討論まで参加した聴衆がわずか2名だったことで、特に19世紀の思想史の専門家からの意見が聞きたかったところである。なお、討論時には、バルカンのブルガリア人の間でのヴェネーリン受容や教育運動

との関係、19世紀初めにオデッサやベッサラビアでブルガリア人と同じく在外活動をしていたギリシア人が在露ブルガリア人に与えた影響についての質問が出たことも付記しておく。

### <今後の例会の予定>

5月の例会として、富田武氏の新刊『シベリア抑留者たちの戦後：冷戦下の世論と運動 1945-56年』（人文書院、2013年）の合評会を行ないます。評者は麻田雅文氏（東北大学北東アジア研究センター）、加藤聖文氏（国文学資料館）です。日時は5月17日（土）15時から、場所は青山学院女子短期大学大本館3階会議室Aです。どうぞ奮ってご参加ください。

なお、7月5日にも同じく青山学院女子短期大学にて例会を予定しております。詳細は追ってお知らせいたします。

### <韓国ロシア史学会報告>

和田春樹

3月22日ソウルで韓国ロシア史学会主催の国際学術大会「露日戦争110年を迎えて」が開かれた。韓国スラブ学会から二年前に独立して新学会で、会員は80名ほどだという。会長は金南燮氏で、インディアナ大学で学位をとった、黒宮君の弟子である。事務局長はソウル大学歴史研究所の趙准培氏で、スターリニズムの研究者である。われわれが知る人では、先年ロシア史研究会大会に招いたソウル大西洋史の教授韓正淑氏が中心人物である。

さてこのたびの会議では、東北アジア歴史財団の金榮洙氏が中心になって、モスクワ大学での恩師アイラペトフを招き、あわせてペテルブルクからルコヤーフを招いたのである。彼は二年前に景仁文化社から『吹雪の時代——乙未事変と露館播遷』を刊行している。ロシアの文書館資料により閔妃殺害にはじまる露韓の接近を研究したものである。彼は今回の会議では、アバザーの1905年の調書「朝鮮におけるロシアの企業活動」とアバザーが編集した極東委員会文書資料集を紹介する報告をした。

私は日本での研究史を報告してほしいと言われたので、司馬遼太郎の見方、私と千葉功氏との意見の対立点、加藤陽子氏の最近の評価（「自らの安全保障上の懸念から韓国の排他的な支配を図ろうとした日本と、それを認めぬロシアとの間で戦われた戦争」、「交渉決裂は、朝鮮半島の39度線以北に中立地帯の設定を求めるロシアと反対する日本の対立点が解消されなかったため」）を紹介し、あとは開戦直前の過程をロシア資料で説明した。

ルコヤーフの方は、忠実にロシアでの研究史を報告したが、ロシア史研究所の前所長サハロフが古ルーシの専門家なのに、日露戦争を突然論じ出し、ロシアは負けていなかったと「愛国的」な論文を書いていると辛辣であった。この他では、ロシア軍の捕虜になった日本兵の中に朝鮮人がいたという趙ジェゴン氏（徳成女子大）の報告が注目された。

### <会計担当より>

ロシア史研究会の会計年度は4月1日ではなく9月1日始まりです。2013/2014年度（2013年9月1日から2014年8月31日）の会費をまだお支払いでない方は、ご入金をお願いいた

します。休会期間や退会期日も会計年度と同じく9月-8月で手続きを行ないますので、  
ご注意ください。

#### <名簿担当より>

2014年1月～3月の新入会員（6名）をお知らせします。

- ・ 巻波 洋平（2014年1月21日入会）  
所属：（株）サクラクレパス  
専攻：戦後ソ連の外交政策（イラン問題を中心として）
  
- ・ クラーノフ アレクサンドル（2014年1月30日入会）  
所属：日本研究者協会(ロシア)  
専攻：日露関係史（在日ロシアディアスポラ、日本におけるロシア神学校、ロシア  
における日本イメージ）
  
- ・ 早坂 圭一（2014年2月2日入会）  
所属：名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程  
専攻：地域研究(ドイツ語圏とロシア語圏)、ロシア・ドイツ人のアイデンティティ
  
- ・ 矢口 啓朗（2014年3月7日入会）  
所属：東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻博士後期課程  
専攻：ニコライ一世の時代におけるロシアの対外政策やヨーロッパの国際関係、  
特にクリミア戦争勃発過程
  
- ・ 長谷川 雄之（2014年3月7日入会）  
所属：東北大学大学院文学研究科歴史科学専攻博士後期課程  
専攻：現代ロシア政治、とくにプーチン政権下の政治制度改革について
  
- ・ 長沼秀幸（2014年3月19日入会）  
所属：東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻アジア史専門分野博士  
課程  
専攻：ロシア帝国によるアジア・ロシアの異族人統治

-----  
ロシア史研ニューズレター  
第93号 2014年4月24日発行  
編集・発行 ロシア史研究会ニューズレター委員会  
（金山浩司、立石洋子）  
〒169-8050  
東京都新宿区西早稲田1-6-1  
早稲田大学 教育・総合科学学術院  
小森宏美研究室気付  
-----